

特 別 講 演

座 長 熊本県医師会会長 福 田 稔

演 題 『悩む力 - 意味への意志について』

講 師 東京大学大学院 教授 姜 尚 中 先生



東京大学大学院 教授

カン サン ジュン
姜 尚 中 先生

【ご略歴】

1950年、熊本県熊本市に生まれる。

早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。旧西ドイツ、エアランゲン大学に留学の後、国際基督教大学助教授・準教授などを経て、現在東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授。

専攻は政治学、政治思想史。テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍。

主な著書に『オリエンタリズムの彼方へ—近代文化批判』、『マックス・ウェーバーと近代』、『ナショナリズムの克服』、『姜尚中の政治学入門』、『日朝関係の克服』、『在日』、『ニッポン・サバイバル』、『愛国の作法』、『悩む力』、『母～オモニ』、『あなたは誰？私はここにいる』など。

- ・1950年 熊本県熊本市生まれ
- ・1974年 早稲田大学政治経済学部政治学科卒業
- ・1979年 早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了
- ・1996年 ドイツ エアランゲン大学に留学の後、国際基督教大学準教授などを経て
- ・1998年 東京大学社会情報研究所助教授
- ・2004年 東京大学社会情報研究所教授（組織統合に伴い）
東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授
- ・2010年 東京大学大学院情報学環 現代韓国研究センター長

「悩む力 – 意味への意志について」

東京大学大学院 教授 姜 尚 中 先生

東日本大震災から一年半以上が過ぎ、あの時に全国で盛り上がった「きずな」の大合唱は、今ではほとんど過去の出来事のように忘れ去られつつあります。しかし、住環境や生活の糧を奪われた人々や放射能汚染の不安を抱えた人々、さらに住み慣れた故郷から流離の境遇を生きざるをえない人々など、多くの市井の人々が今も苦しみや悲しみを抱えたまま、見捨てられようとしているように思えてなりません。

私も家族の不幸から一年、東日本大震災に直面し、ほどなくして福島県の相馬市や飯館村などを訪れ、その凄まじい破壊の爪痕をこの目で確かめることになりました。行方不明者も含めて二万人近くの尊い生命が失われるとともに、大地は原形をとどめないほど崩落し、豊かな緑野は放射能によって汚染され、人々は戦乱と同じような悲惨の中にありました。その中である被災地の古老が呟いていた言葉が忘れられません。「神も仏もない。でも、どうか自分たちのことを忘れないでくれ」。

いかにメディアが忘れっぽいとはいえ、もう被災地のことは見事にメディアの中からかき消され、忘却の彼方に去っていった感があります。復興という言葉が空虚に聞こえるほど、新しい生活基盤の再建は遅々とし進まず、そして被災者や家族を失った人々は、今も深い喪失感に喘ぎながら、北国の冬を迎えようとしているのです。

被災地の人々に手を差し伸べるべき政治は、政争に明け暮れ、メディアや世論は、僻遠の岩礁や島嶼をめぐる中国や韓国との対立に血道を上げ、「3・11」の大震災はまるで遠い昔の出来事になってしまったようです。

しかし、私は「3・11」の東日本大震災は、あの終戦の「8・15」に匹敵する歴史的な出来事だったと思います。「8・15」が戦争に負けた日であるとする、「3・11」は、自然に負けた日として記憶されていくに違いないと思うからです。

敗戦は、戦争を生み出すし、それを推進していった政治や社会、文化や価値、要するに日本列島に生きるすべての人々の生き方を根源的に問い直すことになりました。戦後の日本は、そうした産みの苦しみの中から出発し、見事に復興を成し遂げたのです。

しかし、やがてそれが高度成長になり、国土の見境のない乱開発や巨大な利益誘導の構造、さらにそれに寄生する様々な利害のシステムや会社主義に縛られた人生コース、階層的な序列に基づく教育システムや過度の受験競争、政治家の世襲化や強固な官僚制支配など、根深い病理が、世界が羨むような安全で安心、豊かなはずの経済大国の深部を蝕みつつありました。

「3・11」は、そうした負の側面が、少子高齢化と経済の収縮、格差の拡大と地域経済の疲弊が誰の目にも明らかになりつつあった「失われた10年」、いや「失われた20年」にトドメを刺すように東日本を襲ったのです。先端的な科学技術や土木技術も、自然の猛威の前には無力でした。そして科学と技術の粋を集めたような原子力エネルギーの施設も残骸と化し、人体や自然を放射能汚染の恐怖にさらすことになりました。

もちろん、こう言ったからといって、わたしは安易な反科学主義や曖昧主義に組みしたいと思って

いるのではありません。むしろ、わたしたちの意識の中に巣食う素朴な科学信仰や技術力に対する傲慢さを指摘したいのです。そしてそれらが巨大プロジェクトによって支えられ、さらに中央や地方を巻き込んだ「原子カムラ」という、運命共同体的な利益構造にまで膨れ上がった果てに、あの「3・11」が起きたのです。

このような破綻は、偶さかの出来事ではないと思います。それは、この社会の構造や価値さらに幸福感や生き方にまで掘り下げて考えなければならない問題です。

わたしは、家族の不幸と「3・11」の膨大な不幸とを重ね合わせ、『続・悩む力』を書きました。ここでその「あとがき」の一部を引用したいと思います。

「楽観論は力に通じ、悲観論は虚弱に通じる。この格言のような言葉が意味しているのは、幸せな人生を送りたければ、明るく、健康で、楽しく、積極的で、みんなと仲良くし、何ごとにもくよくよせず、いつも前向きでなければならないということである。心身ともに精力的で、活動的で、晴れやかな毎日。まるでどこかの強壮剤のCMと見まがうような言葉こそ、この数十年に及ぶ私たちの社会のモットーだった。

そしてこれまでの幸福論の多くが、どうすれば明るく、まともに、壮健に、幸せになれるのか、この問いに答える「魂の養生法」のようなものだったのではないだろうか。だが、新しいミレニウムから10年あまり、そんな養生法の説く楽観論や幸福論の底の浅さが明らかになりつつあるとき、あの「3・11」の事態が起きたのである。…私が本書で言いたかったこと、それはそのような楽観論的な人生論を篩にかけ、悲観論を受け入れ、死や不幸、悲しみや苦痛、悲惨な出来事から目をそらさず、しかしだからこそ、人生を存分に生きる道筋を示すことだった。それは、「人間が、はかなく死ぬ運命にあるということを念頭に置いて、あくまでも謙虚に人間的なるものを肯定する」ということにほかならない」。

講演では以上のような趣旨から、現代に生きる、現代を生きる「悩む力」についてわたしの思うことをみなさんに語るつもりです。